

第28号

巻頭言 ……1

2015年度 活動報告 ……2

2016年度 活動計画 ……4

今年の飛行調査 ……5

自然にお返ししては
どうでしょうか ……5

江戸時代の史料 ……5
から探るツルと人
との関係史

<トピックス> ……7
クリル国家自然保護区と
RCCとの共同プロジェクト
として、今年からタンチョウ
の標識調査がはじまります

<活動記録> ……8

標識調査中に見た酪農地帯のタンチョウ

理事長 百瀬邦和

毎年6月から7月はタンチョウ標識調査のシーズンです。この期間は、本番に向けての予備調査を含め、タンチョウ繁殖地の広い範囲を走り回ります。標識調査の際には、乳牛を飼育している牧場とその近くにある牛の糞尿置き場や餌用のサイレージ(粉碎したトウモロコシの茎やコーンの貯蔵場)、また、放牧地に注目します。これらが揃っている牧場は多くのタンチョウが餌場の一部としていて、育雛期間中も例外ではありません。今回調査を実施した20ヶ所のうち8ヶ所はこうした牧場でしたが、農家に了解をいただいて調査を行う事が多いのです。

今シーズンは、例年ヒナが良く見られる為に欠かさず観察に行っている牧場の中に、ヒナどころか成鳥のツルすら見られないところが出てきました。よく見ると牛舎の中に牛の姿がありませんので、離農したか、あるいは牛の飼育を止めてしまったのでしょうか。牛舎を餌採り場としていたタンチョウが見られなくなったのにはこういう事情があったのです。資料によれば根室地方の「乳用牛飼養戸数」は最近5年間で10%少なくなっています。今後しばらくはこうした傾向が続くでしょうが、酪農地帯で生活しているタンチョウの餌環境への影響が心配されます。牛の餌という格好な餌を得て今も増え続けているタンチョウにとって、こうした酪農を巡る環境の変化が、タンチョウを湿原への回帰に向かわせるのか、または、限られた牧場へ集中することにより農業との摩擦を大きくするのか、あるいはタンチョウの個体数そのものに影響していくのかが、心配されるどころです。

2015年度 活動報告

★調査研究活動

<タンチョウ生息状況調査>

・繁殖状況調査

飛行調査を2015年4月25日～5月5日に実施しました。この調査には、環境省事業(釧路湿原地域)、帯広開発建設部事業(十勝川地域)、日本野鳥の会との共同調査(厚岸・風蓮湖地域の一部)、エコトーンプロジェクトからの寄付金による調査(オホーツク地域)が含まれています(調査日数11日うち調査実施日9日間で16フライト:総調査飛行時間48.5時間)。この調査で確認された繁殖つがい数は444でした。またその後の地上調査情報と環境省の道北調査の確認数を合わせると、2015年の道内の繁殖確認つがい数は464となりました。

・総数調査

総数調査は、2016年1月31日～2月9日の期間に、9日間実施されました。調査に参加したボランティアは総勢62名、のべ156人でした。調査は概ね例年通り実施できました。天候に恵まれたことと鶴居村のデントコーン畑への集中が幸いして、タンチョウの確認数は過去最高となりました。各地区毎に班長が精査した確認数を集計すると、総数は1,800羽以上になります。今後、調査結果を50羽単位の概算数にまとめ、タンチョウ保護研究グループの今冬の最低限の概算総数として発表します。

<タンチョウ標識調査>

2015年6月20日～7月20日の期間に14日間実施し、合計27羽を標識放鳥しました。調査に参加したボランティアは総勢46名、のべ169人でした。寺岡理事がボランティアで、ヒナから採血した試料よりDNAによる性別判定をして下さいました。また標識作業中にヒナが排泄した糞便を採取し、釧路市動物園の内部寄生虫に関する研究活動に試料提供しました。

2015年12月以降までに、標識放鳥したヒナの内24羽が確認できています。

<タンチョウ生息地分散>

- ・2015年11月22日～23日、舞鶴遊水地にタンチョウを呼び戻す会(長沼町)の十勝地方視察(日本生態系協会主催)に同行し、現地案内と説明を行ないました。
- ・環境省保護増殖事業の「目撃情報収集業務」(本年度から開始した、環境省直轄の3大給餌場における給餌量削減の影響を調査する目的)を受託し、市町村や農協等の団体へ冬期のタンチョウ目撃情報のアンケート調査を行ないました。

★保護・保全活動

<タンチョウその他ツル類に関する講演・講習会>

- 2015年8月13日、釧路市立博物館にてRCC主催の講演会を行ないました。
- ・タンチョウとシマフクロウの最新の研究活動について「タンチョウの今ーロシアとの比較から見えてきたことー」
正富欣之 博士:当会理事
「シマフクロウ研究の最前線」
竹中 健 博士:シマフクロウ環境研究会代表

○以下の学会・研究会で発表しました。

- ・2015年7月29日に第5回国際野生生物管理学会Vth International Wildlife Management Congressのシンポジウムに参加し、「北海道におけるタンチョウの繁殖状況:ロシア極東との比較」(正富欣之理事)、「北海道におけるタンチョウ保護の取り組み」(百瀬理事長)について発表しました。
- ・2015年8月30日～9月4日、ロシアダウルスキー自然保護区で開催されたツル研究会「旧北区のツル類:生態と保護(第4回学術会議)」に百瀬理事長が参加し、標識したタンチョウの追跡調査結果について発表しました。

<提言等>

- ・飛行調査で確認された営巣地点情報を基に、北海道開発局池田河川事務所の十勝川築堤ほかの工事に対して、生息するタンチョウへ配慮すべき注意事項を助言しました。

・根室振興局農村整備事業の「タンチョウの繁殖に悪影響を与えないためのヒアリング」に対応しました。

＜会報の発行・ホームページ制作等＞

・会報25号、26号、27号と、TKGニューズレターNo.58とNo.59を発行しました。

・ホームページはWhat's New を11回アップし、「主な活動」の内容更新を行ないました。また、英語版ホームページの作成を進めています。

＜出版物発行等＞

2015年10月10日に会員の西岡秀観さんが最新の標識情報に基づき、「標識鳥ファイル」を更新しました。

「標識鳥ファイル」は標識個体情報の公開普及を目的に、当法人事務所のほか、日本野鳥の会鶴居・伊藤サンクチュアリと阿寒国際ツルセンターなどに設置されています。

＜中標津俵橋湿原ゆめプロジェクト＞

中標津町より借用している俵橋湿原内の町有地でトウモロコシ畑を耕作しました。除草剤と防鳥ネットを使用し、夏以降に数回の除草を行ないました。耕作したトウモロコシはそのまま収穫せずにおき、2015年10月13日に畑の横に冬季給餌台(ニオ型)を設置しました。さらに俵橋湿原から約4km離れた武佐川沿いの中司農場の畑に二つ目のニオを設置させていただきました。ニオの作成には、会員の榊原源士さんの農場からトラクター一台分の茎付きデントコーンを、また、中標津農業試験場から約300kgのデントコーンの提供を受けています。今冬、この畑と二つのニオを利用して少なくとも2つがいのタンチョウが越冬したと判断されますし、さらに別の2つがいが利用した可能性があります。

＜キナシベツ湿原プロジェクト＞

本プロジェクトは、会員の榊原源士さんが主催する「キナシベツ湿原を愛する会」の活動に協力し、タンチョウの繁殖地であるキナシベツ湿原の永続的な保全を目的としています。2015年度は北海道釧路総合振興局の担当者と連絡調整を図りました。2016年度早々に、道指定の自然保護地区等の指定を受けるための書類準備と打ち合わせを始めます。

★国際協力活動

＜IRCNと協力(中国のタンチョウ生息地とその周辺国境地帯における普及啓発のための国際プロジェクト、中国・韓国・ロシアにおけるタンチョウの生息状況把握のための情報交換等)＞

・2015年8月24日～9月4日に、中国の向海国家級自然保護区とホアンジドン湿原での学生達による教育普及活動(国際ネイチャースクール)に会員の高田令子さんがボランティア参加しました。

・2015年9月26日にロシア沿海州のガイボロンで開催された国際タンチョウネットワーク(IRCN)のカウンシル会議に百瀬理事長が出席しました。百瀬ゆりあはIRCNの代表として出席しました。

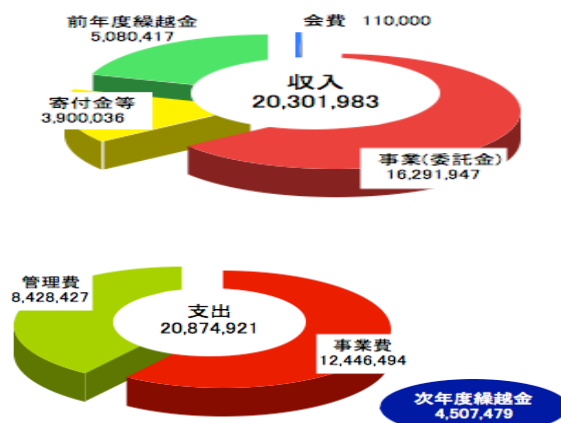
・2015年12月11日～19日、韓国のカウント調査に松木護研究員がボランティアで参加し、ICFによる同国ツル類生息地視察にも同行しました。

＜世界のツル関係者との交流及び情報交換＞

・2016年1月24日に来釧したICF(国際ツル財団)関係者のジョシュア・デイン博士に北海道のタンチョウの現状を紹介しました。(百瀬理事長、百瀬ゆりあ、松木護)

・2016年1月26日～30日に、エコツーリズムを用いてのツル類の生息地保護とワイズユースに関連する視察のため韓国から来釧した、鐵原市視察団の対応をしました。(百瀬理事長、百瀬ゆりあ)

2015年度収支実績



2016年度 活動計画

★調査研究活動

- ・タンチョウ生息状況調査:春の飛行調査と年間を通じた繁殖状況調査、および総数調査を行います。
- ・タンチョウ標識調査:ヒナへの標識と標識個体の追跡調査を行います。
- ・大陸と北海道とのタンチョウの遺伝子解析:韓国で収集した羽を使い、酪農学園大学寺岡研究室が分析を行います。
- ・DNAを使った餌の調査:酪農学園大学寺岡研究室と釧路市動物園との共同研究で、飼育下タンチョウの糞中に含まれるDNAを分析し、餌生物の同定調査を行います。
- ・タンチョウ生息地分散:環境省事業の「越冬地分散アンケート調査」を行う他、新規営巣地についての情報収集等を行います。
- ・農家の営農状況と営巣地との関係調査:今後の農業形態の変化がタンチョウの繁殖に与える影響を予測する調査を行います。

★保護・保全活動

- ・傷病個体の保護収容への協力等:環境省等より要請のあった場合に対応します。
- ・中標津俵橋湿原ゆめプロジェクト:デントコーン畑の耕作やニオの設置を行なうとともに、タンチョウとヒトとが永続的に共生できる環境の再生を目指して、将来図を描き、それに基づき繁殖環境、越冬環境整備に向けた活動を行います。
- ・キナシベツ湿原プロジェクト:キナシベツ湿原を愛する会に協力し、同地区の自然保護区指定に向けた手続きを進めます。

★教育普及活動

- ・タンチョウその他ツル類に関する講演・講習会:タンチョウやその他ツル類などに関する最新の情報を広く紹介する為に、講演会を随時開催するとともにRCCの活動の成果等を紹介する勉強会を行います。
- ・会報の発行・ホームページ制作等:会報のTanchoを年3回、TKGニュースを年2回発行します。ホームページは随時更新し、新たに英語版を作成します。
- ・出版物発行等:冬季前に標識鳥ファイルを更新します。

★国際協力活動

- ・国際タンチョウネットワークの活動への参加・協力:中国で毎年開催されている国際ネイチャースクールに参加します。また、データの提供等を通して国際自然保護連合のツル専門家部会の活動に参加します。
- ・世界のツル関係者との交流及び情報交換:研修、視察等で北海道を訪問される国内外のツル類の保護活動関係者へタンチョウの現状を紹介するとともに、情報を交換、交流をします。

★その他の活動

- ・提言、活動資金の調達、等:行政の行う各種事業が、タンチョウの生息に悪影響を与えないよう助言します。また、環境省等の今後のタンチョウの保護活動の方向性について、提言を行います。また、本会の活動を支える為の資金調達に向け、企業等の寄付協力を募る活動を行います。

今年の飛行調査

百瀬 邦和

今年は十勝地方と勇払・日高地方の飛行調査を行いました。勇払・日高地方の調査にはHSBCグループの支援を受けています。調査は4月20日と21日の二日間で終了しました。

苫小牧から日高のえりも町にかけては、昨年からタンチョウの目撃情報が多くなっていて、4年前から同地方で繁殖を始めたつがいに加えて二組目の繁殖つがいを確認できる期待があるために実施しました。勇払地方のウトナイ湖など千歳空港周辺の調査は定期便や自衛隊航空機の発着が激しいことから、日中の

飛行制限が厳しくなっています。そこで、発着の少ない早朝に調査を済ますように、丘珠空港を6時に出発しなくてはなりませんでした。

勇払・日高地方では従来からの1繁殖つがいを確認されたのみでしたが、この営巣状況を上空より確認したのは初めてで、記録写真は地元で熱心に保護活動を行っている「むかわタンチョウ見守り隊」に提供しました。

十勝地方の繁殖つがい数は昨年よりも多くなりましたが、詳細については現在精査中です。

自然にお返ししてはどうでしょうか

俵橋湿原プロジェクトゆめプロジェクト代表 阿部 嗣

7月1日付の道新朝刊に、農業人口の減少がつづいているとの記事がありました。全国では、この10年間で4割も減ったとのこと。北海道では、減少幅が小さいとのことですが、各地に耕作放棄地が増えてきているそうです。北海道は、明治以降北方警備、食料増産、自作農創設の名の下に、開拓が進められてきました。更に、先の大戦後は、国策による大規模開発が推進され、森が伐り開かれ、湿原は干し上げられて、自然は無残な姿になってしまいました。

結果、私達は物質的には豊かな生活を享受できるようにはなりましたが、多くの大切な物を失ってしまったのではないのでしょうか。

大自然の懐で自由に暮してきた鳥や獣を始め、多くの動植物達は随分と窮屈な生活を強いられてきました。絶滅が心配される種も増えてきました。

この辺りで私達は、大きな恩恵を受けてきた自然に対し、お返しをしてあげてはどうでしょうか。

即ち、使われなくなった農地や拡張過ぎた農地の周辺だけでも木を植えたり、干し上げた湿地で生産性の低い牧草地を元の湿原に戻したりとそれは実に簡単なことです。周りを見渡してみませんか。

そんな土地が随所にあるでしょう。中標津町にある、元湿原だった俵橋地区大規模草地跡もその候補の一つです。

私達は、昔日の湿原の姿を思い浮かべながら夢を描いていきます。



江戸時代の史料から探るツルと人との関係史 —ツルを獲り、飼い、食べていた頃の話— 北海道大学大学院文学研究科専門研究員 久井 貴世

5月28日に釧路市立博物館で、「江戸時代の史料から探るツルと人との関係史—ツルを獲り、飼い、食べていた頃の話—」をテーマに講演を行いました。

私の研究は、江戸時代に書かれた古い史料から「鶴」を探し出すところからはじまります。これまでに、全国各地の図書館や博物館を巡り、日本中の

「鶴」を探してきました。分厚い本をめくって1羽も見つからないこともあれば、ページをめくると「鶴」がいることもある…、そんな作業を10年近く続けています。

古い史料に書かれている「鶴」ですが、これは現代の“なにヅル”に当たるのでしょうか。これを明らかにするため、江戸時代の記載をもとに「鶴」の同定を行います。カメラも双眼鏡もない時代ですが、当時の人々の動植物に関する知識は極めて高い水準にあったと評価されています。この時代に発展した本草学や博物学には、現代でも通用するような鋭い情報が記され、かなり正確に描かれた博物画なども残っています。

「鶴」についても多くの情報が残されており、江戸時代の史料からはタンチョウ、マナヅル、ナベヅルのほか、ソデグロヅル、アネハヅル、カナダヅルなどの情報が確認できました。古い史料に書かれている「鶴」ですが、これは現代の“なにヅル”に当たるのでしょうか。これを明らかにするため、江戸時代の記載をもとに「鶴」の同定を行います。カメラも双眼鏡もない時代ですが、当時の人々の動植物に関する知識は極めて高い水準にあったと評価されています。この時代に発展した本草学や博物学には、現代でも通用するような鋭い情報が記され、かなり正確に描かれた博物画なども残っています。「鶴」についても多くの情報が残されており、江戸時代の史料からはタンチョウ、マナヅル、ナベヅルのほか、ソデグロヅル、アネハヅル、カナダヅルなどの情報が確認できました。

タンチョウは「丹頂」や「丹頂鶴」、あるいは「白鶴」と書かれますが、「白鶴」はソデグロヅルを指す場合もあります。当時「黒鶴」と書かれていたのはクロヅルではなくナベヅルで、ナベヅルには「陽鳥」や「きぬかづき」という別名も使われました。さらには方言名なども加わるため、「鶴」の同定はなかなか大変な作業ではありますが、おおよそ現代の種に比定することが可能です。また、ツルと混同されていたといわれるコウノトリですが、本草学や博物学ではコウノトリは「鶴」として「鶴」と区別され、形態的にも生態的にも異なる鳥類であることが認識されていたようです。

ツルは、かつては日本各地に生息していたといわれていますが、「鶴」の同定が可能な史料を用いれば、江戸時代のツルの分布を復元することができます。

例えばタンチョウの場合では、当時蝦夷地と呼ばれていた北海道は勿論、東北から関東地方にかけて記



講演者
久井 貴世さん
(ひさい あつよ)

録が確認できます。さらに、中国・四国・九州地方など西日本でも記録があり、大陸との往来も推察されます。また、あまりタンチョウのイメージがない奄美大島や琉球の史料にも、タンチョウについての記載がみられます。蝦夷地(北海道)では、道東部だけでなく、道南・道北・道央部、つまり北海道中に広くツルの記録が残っています。特に、当時はイシカリ(石狩)やシコツ(千歳)など、道央部の石狩低地帯に多くのタンチョウが生息していたようです。また、蝦夷地にはタンチョウだけでなく、「白鶴」(ソデグロヅル)、「蒼鶴」(マナヅル)、「黒鶴」(ナベヅル)などのツルも生息し、アネハヅルやカナダヅルに関する記録も確認できます。

全国各地に広く分布したツルは、自然の景物として愛でられるだけではありません。江戸時代の武家社会では、ツルは最も重要な鳥類のひとつとして活発に利用されていました。特に、領主の狩猟である鷹狩ではツルが最高位の獲物であり、幕府では、徳川将軍自らが放つタカでツルを捕獲する「鶴御成」と呼ばれる重要な年中行事もありました(図1)。



図1.「千代田之御表 鶴御成」(橋本周延画, 明治30年)／国立国会図書館所蔵

重要な獲物であるツルは、江戸時代を通じて厳重に「保護」されました。例えば、鷹狩の実施場所となる「鷹場」へのツルの渡来や定着を維持するため、範囲内の村々ではツルの支障になり得るあらゆる行動が制限され、専門の役人による監視や環境整備も行

われました。また、鷹狩を成功させるための準備として、専門の役人が給餌によってツルを飼い付け、人に馴れさせるための仕込みも行われました。江戸時代のツルの「保護」とは、領主の狩猟の獲物を確保するという意味での「保護」であり、獲ることを目的とした資源管理だったといえます。このような江戸時代の権威による過剰ともいえる厳重な「保護」により、各地にツルにとって安全な生息地がもたらされ、これが広域的なツルの分布にも影響したと考えられます。

一方で、人馴れしたツルによる農作物への被害も発生していたという負の側面もありました。「鶴御成」で捕獲されたツルは、将軍から天皇へと献納され、年始に宮中で行われる「鶴庖丁式」という儀式に用いられました。あるいは、ツルは全国諸藩から将軍への献上品、将軍からの下賜品としても利用されており、ツルの贈答は相手に対する忠誠や友好を示す儀礼的な意味を有しました。例えば盛岡藩や姫路藩、長州藩などの諸藩では、毎年、領内でその年に初めて捕獲した「初鶴」を将軍へ献上することが定められていました。一方で松前藩は、ツルの一大生息地である蝦夷地を有していたにもかかわらず、「初鶴」の献上は定められていませんでした。「初鶴」として用いられるツルは主に「黒鶴」(ナベヅル)や「真鶴」(マナヅル)であり、塩漬けにされた「塩鶴」の状態で献上されました。

これに対して、松前藩は生きたままのタンチョウを多く利用し、将軍への献上をはじめ、水戸黄門への贈与や、他藩への販売にも用いました。松前藩は、タンチョウ以外のツルや「塩鶴」も利用していましたが、他藩とは異なるかたちで蝦夷地のツルを有効に活用していたことがわかります。生きたツルは主に飼育用に好まれ、特にタンチョウに高い需要がありました。一方、タンチョウは「肉が硬く美味くない」といわれ、食用としては「鶴類中の上品」といわれるナベヅルや「味は黒

ヅルに次ぐ」といわれるマナヅルが好まれました。ツルの調理法は鍋物、焼物、味噌漬など様々ありましたが、「鶴の汁」と呼ばれる吸物に多く用いられていたようです。ツルの骨で出汁をとり、きのこなどの旬な食材を入れて中味噌やすましに仕立てるといった簡単な料理ですが、「鶴の香を賞する」ためにツル肉は盛りつける直前に入れる、盛りつけたあとはすぐに蓋をするなどの注意点もありました。ただし、実際の献立では、「鶴の香」を邪魔するようなゴボウや松茸、柚子など香りの強い食材も用いられており、「鶴の香」とはある意味、独特の「臭み」だったのではないかという印象も受けます。また、加賀藩では、ツルが確保できない年の代用品として、加賀の名産品である「イナダ」(塩引きのブリ)を使った「つるもどき」という汁物がつくられました。私は当時の作り方をもとに、塩漬けしたイナダを干すところから「つるもどき」を再現してみましたが、残念ながら(当然ながら?)、これが「鶴の汁」の味に似ているのかどうかはわかりませんでした。このように、江戸時代の史料には、これまでにあまり知られてこなかったツルと人との関わりの記録が数多く残されています。今回ご紹介したのはそのなかのごく一部であり、会場の皆さんからも、生類憐れみの令によるツルへの影響や、食肉として利用する際のツルの処理方法についてなど、たくさんの質問をいただきました。ほかにもアイヌとツルとの関わりや、明治以降の関わりの変化など、今回ご紹介できなかった興味深い情報がまだまだ残されています。今後は、新たな情報を発見するべくさらに調査を続け、色々なかたちで情報を発信していきたいと考えているところです。

最後に、講演の機会を与えて下さった仮認定特定非営利活動法人タンチョウ保護研究グループ、釧路市立博物館および釧路市立博物館友の会の皆様に心より厚く感謝申し上げます。

<トピックス>

クリル国家自然保護区とRCCとの共同プロジェクトとして、今年からタンチョウの標識調査がはじまります

百瀬 ゆりあ

6月10日から16日まで、クリル国家自然保護区から、学術調査研究担当副所長のエフゲニー・コズロフスキー氏を団長とする視察団が道東にみえました。

14日の午後に釧路湿原をご案内し、そのあとの意見交換の場でタンチョウの標識調査を共同で始めること

になりました。当法人がドイツで作成したプラスチックのカラーリングを提供し、クナシリ島で7月中の装着が計画されています。クナシリ島では、今冬初めて一番いのタンチョウの越冬が確認され、また、ウルップ島でも昨シーズン一羽の飛来が初確認されたそうです。

<活動記録> (2016年4月～7月)

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 4月5日 | 俵橋湿原ゆめプロジェクトの連絡会
(於:中標津町役場 百瀬、井上、松木、百瀬Y) | 5月28日 | 講演会「江戸時代の史料から探るツルと
人との関係史」開催 講演者:久井貴世
(於:釧路市立博物館) |
| 4月8日 | 運営会議(12名出席) | 6月3日 | 運営会議(13名出席) |
| 4月11日 | 北開水工コンサルタント打合せ(百瀬、百瀬Y) | 6月8日 | 俵橋湿原でデントコーンの種蒔き
(百瀬、榊原、松木、百瀬Y) |
| 4月12日 | JAL本社訪問(百瀬Y) | 6月12日 | 公開シンポジウム「北海道と北方四島の
希少鳥類:シマフクロウ・タンチョウ・オジロ
ワシの“今”を知る」で講演
(於:ゆめホール知床 百瀬) |
| 4月15日 | 北海道バンダー連絡会役員会・総会に出席
～16日 (於:浜頓別 百瀬) | 6月14日 | クリル国家自然保護区の一行を釧路湿原に
ご案内(百瀬、百瀬Y) |
| 4月20日 | 胆振・日高・十勝地方の航空調査
～21日 | 6月18日 | バンディング調査に向けた勉強会(於:わっと) |
| 4月27日 | 俵橋湿原で遺跡調査に参加(百瀬、松木) | 6月22日 | 池田河川事務所で情報交換会(百瀬) |
| 5月9日 | 運営会議(8名出席) | 6月23日 | 釧路湿原自然再生協議会第27回再生普及
小委員会出席(井上) |
| 5月13日 | 上智大学 渡辺氏ほか 取材のため来訪
～14日 (百瀬、百瀬Y) | 6月23日 | 日本生態系協会に同行して長万部の静狩
湿原を視察(正富Y) |
| 5月17日 | JALの広報担当、釧路支店長と話し合い
(百瀬、百瀬Y) | 6月25日 | バンディング調査
～7月18日 |
| 5月21日 | 2016年度理事会
(於:シルバーシティときわ台ヒルズ) | 7月13日 | 運営会議(8名出席) |
| 5月22日 | 2016年度総会
(於:釧路市中部地区コミュニティセンター) | 7月20日 | 環境TV(韓国)の取材を受ける(百瀬) |
| 5月26日 | EAAFP(東アジア・オーストラリア地域フライ
～27日 ウェイ・パートナーシップ)の国内ツル類生息
地交流会へ出席
(於:根室市総合文化会館 百瀬Y) | | |

<会員 (7月21日現在)>

運営会員:27名、個人サポート会員:134名、団体サポート会員:15団体

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Twenty-eighth issue July 2016

<表紙写真>

酪農家の敷地で生活するタンチョウの
親子(268の装着前)

(2016年 6月 豊頃町にて撮影)

特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

編集:hide.N

〒085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>